



## 一休さんのお寺のお堂を意匠性チタン Trantixxii で次世代につなぐ

日本製鉄株式会社（以下、日本製鉄）の意匠性チタン Trantixxii®(トランティクシー)が、京都府京田辺市にある臨済宗大徳寺派の酬恩庵一休寺（以下、一休寺）境内にある開山堂の屋根に採用され、2024年9月8日に落慶法要が行われました。

一休寺は、鎌倉時代（1288年～1293年）に創建された臨済宗大徳寺派の寺院で、室町時代に活躍した一休さんのアニメでも知られている一休禅師（一休宗純）を中興の祖とする大きな寺院です。方丈の庭園は江戸時代に作庭をされた枯山水庭園で国の名勝に指定をされており、もみじの名所としても知られています。一休寺は元の名を妙勝寺といい、鎌倉時代の高僧大應国師が道場をこの地に建てたことに始まるお寺です。境内にある開山堂は、一休禅師が63歳（1456年）の時に建立された大應国師の木像を祀っているお堂で、改修前の建物は二代目にあたり、大正時代に建立された百年建築物です。

その屋根は伝統的工法の最高峰である檜皮葺きですが、長年の風雨による損傷が著しく、激しく雨漏りをしていた状態でした。初代の開山堂は450年以上に渡り檜皮葺きで改修を繰り返してきましたが、檜皮葺きの耐用年数が40年程度と言われる中、実に10回を超える改修を繰り返してきたことになりま

す。一休寺は、今回の開山堂の屋根へのチタンの採用を修繕プロジェクトであると同時に、現代の課題を反映した新たな文化財継承の在り方を提案する試みだと考えています。気候変動により伝統建築で多用されてきた自然由来の素材や銅素材での長期耐用が難しくなっています。また、南海トラフ地震に代表される大地震発生の確率も高まっており、少子高齢化により建設に携わる職人の減少などの課題もあります。チタンは耐食性が高く長寿命である特徴を活かし、これらの伝統建築の課題解決に貢献して参ります。

本改修では、伝統建築に最新の技術を使うという信念のもと、京都の数寄屋大工棟梁である匠和心傳庵・木下幹久氏がチタンによる修繕プロジェクトを提案し、チタンが採用され30年以上経過した現在も何の不具合も発生していない新庫裡と同じブラスト意匠のチタンの採用に決まりました。また、開山堂に続き傷みが激しかった唐門もチタンに葺き替えられました。唐門は檜皮葺きの意匠を継承する目的で、コケラ色の茶色いチタンが採用され、もみじなどの木々との相性にも馴染んでいます。

高い耐食性、加工性の良さ、熱による収縮が少ないといった特長による、屋根の耐久性、信頼性改善にとどまらず、色を塗ることなく、ブラスト加工による粗度調整とチタン特有の干渉色を応用した緑青仕上げの美しさを長期間楽しめることもトランティクシーの特長です。

トランティクシーは、時を超えて“伝統”と“美しさ”を次世代に伝える世界初のチタンブランドです。日本の伝統的な神社仏閣をはじめとして、国内及び海外の著名な劇場やホテル、美術館、教会等、約700件以上の建造物に採用されてきた実績があります。

日本製鉄は、常に世界最高の技術とものづくりの力を結集し、国連で採択された「持続可能な開発目標」(SDGs)にも合致した活動（「11.住み続けられるまちづくりを」のターゲットである「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」）を通じ、これからも社会の発展に貢献していきます。

## 【物件概要】

### 1. 開山堂

物件名：開山堂屋根葺替工事

所在地：京都府京田辺市薪里ノ内 102

設計施工：匠和心傳庵（京都府京田辺市）

素材：意匠チタン TranTixxii®冷延板 AD03 ブラスト仕上げ（屋根一文字葺）

使用量：約 650Kg

竣工：2023 年

### 2. 唐門

物件名：唐門屋根葺替工事

所在地：京都府京田辺市薪里ノ内 102

設計施工：匠和心傳庵（京都府京田辺市）

素材：意匠チタン TranTixxii®冷延板 コケラ仕上げ（屋根一文字葺）

使用量：約 64Kg

竣工：2024 年

## 開山堂写真

### 【全景】



【屋根アップ】



唐門写真

【全景】



▼日本製鉄の意匠性チタン TranTixxii, ホームページ

<https://www.nipponsteel.com/product/trantixxii/>



以 上

プレスリリースに関するお問い合わせ : <https://www.nipponsteel.com/contact/>  
製品に関するお問い合わせ先 : チタン営業部 自動車・建材室 : 03-6867-5611